

白杖使用を拒否したケースの歩行訓練—ケース報告

安山 周平 (公益財団法人 日本盲導犬協会)

原田 敦史 (公益財団法人 日本盲導犬協会)

1. はじめに

静岡県を訪問自立支援事業（以下、自立支援事業）において、白杖使用と日中訓練に強い抵抗を示したAさんの歩行訓練を実施した。今回、白杖を使用せず、夜間中心に訓練を実施したAさんが、最終的に白杖を持つに至るまでの経過を報告する。

2. ケースプロフィール

- ・ Aさん、50代女性
- ・ 娘と孫2人の4人家族
- ・ 視神経炎、視力<右0、左0.03>
- ・ 左眼中心に有効視野があり、日中に薄暗さを感じることもある
- ・ 受傷後7年経過
- ・ 外出が少なく、家族とだけ関わる生活

3. 経過

1) 2010年初め、Aさんは行政の福祉窓口を利用可能なサービスの相談を行う中で自立支援事業を知り、内容をほとんど理解しないまま歩行訓練を申し込んだ。

4月の面接では、今の見え方や受傷前後の経過に関する問いなどに対し、話題をそらす、顔を伏せるなど質問に答えたくないという態度が随所に見られた。また、視覚に障害があることを近隣住民に知られたくないと、特に白杖の使用と日中訓練に強い抵抗を示し、そのような場合には訓練申込みを取り下げの内容の発言があった。一方で、自宅から公園まで（約600m）の単独歩行に対する希望は強く、面接中に同様の趣旨の発言が何度もあった。

そこで、今回は本人の意向を汲み、あえて白

杖を使用せず、夜間に訓練を開始することとした。

2) 初回訓練（2010年5月12日18:00～19:00）では白杖を使用せず訓練を継続する可能性を探るため、自宅から公園までの人通りの少ない住宅街を利用して手引き歩行を中心に視機能と判断力の評価を行った。

その結果、コントラストの低い段差や障害物、摩耗して薄くなった白線であっても視認が可能なこと、LEDライトを使用することでそれらの視認距離が向上すること、左眼中心近くからやや耳側に横長の視野が残っている可能性があることが確認できた。また、自宅近辺の危険で慎重な行動を必要とする個所についても把握が出来ており、さらに交通音の聞き取りなどに大きな問題がないことも分かった。

その他、手引き中に手引き者を押し引きする癖や、視覚確認の際に前傾して覗き込む癖など、危険な行動が見られたものの、訓練で修正出来るレベルであると判断した。

上記の状況から、保有視覚の活用方法とLEDライトの利用方法について指導を行うことで、白杖を使用しない訓練であっても一定の効果が得られると判断した。ここではさらに、白杖導入を試みてIDケーンの紹介も行ったが、周囲の様子をしきりに確認し、手に取ってすぐに訓練士に渡し返す様子から、改めて白杖導入が難しいことも確認できた。

3) 2回目訓練（2010年6月12日18:30～19:30）ではLEDライトを使用して、白線・壁・街灯などの視覚的な利用方法について指導を行った。これにより前方の確認が容易になり、障害物や目標物の発見が早くなることを体験してもらうことが出来た。自宅から公園

までの一部区間では、白線を見ながら単独で歩いてもらったが、Aさんは訓練士が視野に入るよう左前方に立つことを要望し、訓練士が立ち位置を変えると足を止め、大きめの声で探す行動が何度も見られた。また、訓練士に障害物や段差などの確認を行うことも多く、見え方と判断の正否についてフィードバックを多めに繰り返すようにした。

この時のAさんは、状況を確認する以外は自ら発言することがほとんどなく、訓練士からの質問に対し頷くだけであった。

4) 3回目訓練(2010年6月16日18:30~19:30)も同様に、保有視覚の活用方法を中心に指導を行った。LEDライトの使用により前方を見ることが増え、手引きでも単独歩行でも前傾して覗き込む癖が減少して歩行スピードも向上した。また、徐々に手引き歩行にも慣れが見られるようになり、訓練士に対し状況確認を行うことが減少してきた。しかし、単独歩行に対する不安は依然強く、正しく状況を判断できていても足を止める場面が何度もあった。

この時のAさんは、訓練士の問いに頷くだけでなく自発的な発言が増えてきてはいたが、ネガティブな言動が多かった。

5) 4回目訓練(2010年6月30日18:30~19:30)では、自宅と公園間の直線路のほとんどを単独で歩くことが可能となった。これまでに状況判断の正否についてフィードバックを多めに繰り返してきたことで、自分の見え方の特徴を理解し、判断に自信が持てるようになってきたためだと思われる。ただし、道路横断に関しては、視聴覚ともに安全な横断タイミングの判断が可能だが、手引きでなければ横断を開始することが出来ないういた。

この時のAさんは、訓練士が視野に入らなくても足を止めることが減り、ネガティブな言動や不安を口にするものがほとんどなくなった。また、自分の見え方について話をする機会が増え、日中訓練を拒む理由に羞明があることも分かった。

6) 5回目訓練(2010年7月14日18:30~19:30)では自宅から離れた住宅外を

利用して、保有視覚の活用方法を中心に指導を行った。これにより、未知の環境でも現在の視機能を活かして多くのことが判断出来ることを実感し、さらに自信を深めたようであった。また、それに後押しされ単独での道路横断も可能となった。

この時のAさんは、受傷後の生活やこれまでの思いを口にする機会が多くなり、訓練を申し込んで良かったという発言も度々するようになった。また、遮光眼鏡を紹介して日中訓練を提案した結果、サングラスと見た目に違いが少ないことで訓練の理解を得ることができた。

筆者はここを白杖導入の一つのタイミングと考え、そのメリットについて紹介した。Aさんは、白杖の使用により足元への視線の移動が減り、目標物を見失い難くなることや周囲の車や人の反応が変化することについて関心を示し、詳しく説明を求めた。

7) 6回目訓練(2010年7月28日10:00~12:00)では日中に自宅から離れた住宅外を利用して、保有視覚の活用方法を中心に指導を行った。結果、遮光眼鏡の利用により羞明が抑えられ、日中でも現在の視機能を十分に活かし、これまでと同様に多くのことが判断出来ることを実感してもらうことが出来た。また、白杖を使用した場合とそうでない場合の視線の移動や情報の得られ方の違いについて、実際の歩行環境の中で紹介を行った。

この時のAさんは、前回の訓練後に家族との外出で遮光眼鏡と白杖を携帯し、その効果が実感できたことや日中の外出が徐々に増えていることを訓練士に喜んで報告した。また、いずれ白杖歩行訓練を受講したいと口にするようにもなった。しかし、実際には自宅近辺での白杖歩行訓練に踏み切れない様子で、その承諾は得られずにいた。そのため、ここで一度訓練を終了し、経過については電話でフォローを行いながら見守ることとした。

8) 訓練終了から1年ほどが経ち、Aさんから白杖の正しい使用方法を知りたいと連絡があった。再訓練(2011年5月18日13:00~14:30、6月30日10:00~11:30)では日中に自宅から公園までの大通りを利用し

て、基本的な白杖の使用方法について指導を行った。遮光眼鏡の処方を受け、日中でも有効に視覚の活用が行えるようになっていたこともあり、2回の訓練で視覚情報と白杖からの情報をうまく使い分けることが出来るようになった。これ以降は必要な場合に対応するという形で訓練を終了した。

この時のAさんは、白杖への抵抗感がかなり減少し、自宅前から白杖を持ち出してその使い方について質問を行うなど積極的な姿勢がみられるようになっていた。

4. 考察

本ケースでは、生活環境の中で視機能を評価し、LEDライトを使用することで夜間の既知環境だけでなく、未知の環境においても現在の視機能を十分に活用できることを理解してもらうことができた。また、それにより訓練の過程で少しずつ自信を取り戻し、白杖の使用と日中

訓練に強い抵抗を示していたAさんが、遮光眼鏡や白杖といった新たな道具への関心を示すようになり、日中の訓練を受け入れるまでに態度を軟化させていった。さらに、家族との外出も増え、そこではLEDライトや遮光眼鏡に加え、訓練の中では紹介にとどまっていた白杖を携帯するまでになっていた。その結果、日常生活の中で訓練効果と白杖を携帯する効果を繰り返し実感する機会を得て、白杖を使用した再訓練に至ったと考えられる。

白杖を使用することに抵抗を感じながらも、現状を何とかしたいと考える視覚障がい者は多くいると考えられる。視機能を活用できる方であれば、本人の希望に沿って白杖を使用せず訓練を実施することは、QOLを向上させる一つの有効な手段であり、白杖歩行に繋がることもある。歩行訓練＝白杖歩行ではなく、導入時にはケースに合わせた柔軟な対応が必要である。